

# 「オルタナティブ」を志向する 若い市民リーダーは如何にして誕生したか —中国の環境分野で活躍する若者たちのライフストーリーから—

How “Alternative” Oriented Young Leaders Emerged? :  
The Stories to be Told by Young Environmental Activists in China

李 妍 焱  
Yanyan LI

Keywords : 中国の環境保護, 個人化社会, 市民リーダー

## 1. はじめに——中国社会の「個体化」と市民リーダーへの期待

改革開放後の中国の社会変動を、「下からの社会づくりの仕組み」である市民社会の動きに着目して捉えたい、というのが筆者の一貫した問題関心である。その根底には、中国の社会変動を、「個々人が自らの意志に基づいて動ける範囲、選択肢の拡大」という方向性に向かうものとして捉えたい、という意図がある。実際、改革開放後の中国社会を描くキーワードとして、「個体化」が挙げられている（王春光，2013；王力平，2013，冯莉，2014など）。この用語はU・ベックの「個人化（individualization）」概念（Beck, 1992）に基づくが、Yanによれば中国社会の個体化とは、社会的エリートのみならず、すべての人間が合法的に社会的流動を経験できるようになり、個人は家族や何らかの集団に所属する一員としてではなく、彼（彼女）自身として他者と付き合い、人間関係や組織、制度と関係性を築き上げることが可能になったことを意味するという（Yan, 2009 = 2012）。

「個体化」は中国社会においてリスクとして捉えられがちである。王力平(2013)は、ベックが中国の研究者からインタビューを受けた際の言葉を引用し、中国も西欧社会と同様に、リスク社会の段階に入ったと指摘する<sup>1</sup>。

ベックは次のように語った。「現代の中国社会巨大な社会変動によりまさにリスク社会に入り、さらにはハイリスク社会に突入する可能性がある。西洋社会の発展の傾向から見れば、現在の中国は正に普遍的都市化の段階にあり、都市の容積の問題、発展の不均衡と社会階層の分裂、都市と農村の格差の拡大などの現象が顕著であり、これらはいずれもリスクの問題として捉えられる」。(王力平, 2013 : 120)

王力平は、個体化を社会問題の分析の「基点」とすべきだと主張する。社会の問題が直接「個体」の問題として現れるため、社会的な原因の探求が行われなくなる恐れがある。個人の成功と能力の強調により各種社会的不平等が正当化され、合法化されることが危惧される。人々が必死に自らの能力を高め、生きることの意味を与えようとするが、周りの環境は日々絶えず変化していく。頼りになる安全な、精神的な支えはもはやなく、そんな生活に直面する個々人は孤独で不安からは逃れられない。グローバルな利己主義のリスク時代におけるこのような「個体化」の状況は、社会にとってリスク以外の何ものでもないと言王は指摘する(王力平, 2013)。

無論、中国社会の「個体化」とベックが言う「個人化」は同一ではない。王春光(2013)によれば、ベックの「個人化」概念は、福祉国家の制度が確立されているドイツの「第2の近代」を背景とするのに対して、中国は伝統社会と第1の近代(伝統社会からの近代化)と第2の近代(再帰的近代)のいずれも混在する社会であり、福祉国家の制度も形成途上にある。しかし王春光も同様に、改革開放後の中国社会の個体化は、「社会秩序の土台を損ねる」と警告する。

ベックの「個人化」概念は伊藤(2008)によれば、「一般社会学概念」としての個人化、「時代診断」としての個人化、そして「規範的要請」としての個人化の3つに分類できるという。「一般社会学概念」としての個人化とは「人が伝統的な社会形態や紐帯から解き放たれ」、伝統がその確実性を喪失し、個人が社会のなかに新しいやり方で組み込まれることを指す。これは、第1の近代である「伝統社会から産業社会への転換」における個人化と理解できる。「時代診断」としての個人化はいわば「第2の近代」の個人化であり、個人が「産業社会か

ら世界リスク社会の動乱へと解き放たれ」、産業社会の確実性が失われる過程だという。「個々人を防御・支援する機能や、個々人の生やアイデンティティに長期的・持続的に意味を付与する機能」を果たせる集団の寿命が短期化し、十分にその機能を果たせなくなった第2の近代の「個人化」は、主体をフィクションにするという。「規範的要請」としての個人化は、第2の近代を生き延びるための個々人に対する「規範的要請」、すなわち「個々人は自分自身を、(中略)設計事務所として捉えることを学ばなければならない」という積極的な行為モデルへの要請である。伊藤は、「個人化は個人の人生上におけるリスクでもあるがチャンスでもありうる。ベックにおいて個人化は、それ自体が悪なのではなく、肯定的な面も否定的な面も持つものとして想定されている」と主張する(伊藤, 2008 : 321)。

今枝はさらに一步進んで、ベックが言う第2近代における個人化は、「社会の統合を脅かし、解体に導くのではなく、むしろ動的な集合性や凝集性をもたらす」と主張する(今枝, 2009 : 313)。「もはや伝統的な規則や規範に依拠できない現代において、諸個人は手探り状態で自己選択的に他者との関係性を実験的に構築していくほかはない」。その行為には「自分の人生の選択と他者のそれとを調和させる圧力」が含まれているため、「必然的に実験的な文化に向けて開かれており、新しい社会形態を創造する」ことにつながるという。「今では諸個人はかつてよりもはるかに広い選択肢から自分自身の生活史を構築しなければならない。(中略)自己選択的な生活の時代において、諸個人はもはや伝統的規範や所与の選択肢によって統制されない。優先権は構成的な規範に与えられなければならない。それは自己選択的な実験を可能にし、個人化がアトム化に傾くのを妨げる」と今枝はベックの議論をこのように分析している(今枝, 2009 : 312)。

中国における改革開放後の「個体化」の傾向をどう捉えるべきか。克服すべきリスクか、新しい社会規範と社会関係を創出する源となるのか。王建民(2013)は、中国の個体化はベックの指摘よりも複雑だと主張する。第1に、中国社会における「個体化」には強いエゴイズムの色彩が伴う。中国的「個体」の存在は制度的な権利と義務によってではなく、本人を取り囲む人間関係網に依拠す

る。たとえ公共の利益を損なっても人々は個人の間関係網を優先し、利己的に行動する傾向があるという。第2に、「個人」としての精神世界が形成されにくい。改革開放前に精神世界までも集団化されていた人々はその呪縛から逃れがたく、個人として準拠すべき倫理・道徳の規範を見出せない。自分の権利ばかり主張し、他者や公共に配慮しない「無公德人間」が社会問題となる。第3に、各種制度的不備による社会不信の問題。制度的な不公平や公権力の濫用などによって社会的信頼が損なわれ、人々は「自衛する」心理からますます人間関係網に頼るようになる。第4に、インターネットの影響が挙げられる。「オンラインの賑やかさとオフラインの孤独」の同居現象が生じるだけではなく、ネット依存の生活は、自由に検索可能なネットの力を借りて自我を確立させたい側面と、結局は膨大な情報量の前では手も足も出ず、依拠できそうな「権威」を探し求める羽目になるという矛盾を抱え込むという。

このように「中国的個体」は、解き放された個人である一方、利己的で公共心と社会的信頼が乏しく、自我を確立させられないまま多くの矛盾を抱え込む存在だと王建民は指摘する。「個体化」が、中国社会にとって「新しい社会規範と社会関係をもたらす」創造の源となるためには、王が指摘したこれらの問題に如何に対処すべきか、模索しなければならない。

本稿は、中国の若い市民リーダーに注目する。彼らは改革開放後に生まれ育った正に「個体化」時代を生きる世代であり、「広い選択肢から自分自身の生活史を構築する」彼らが、どのように「利己主義と公共心・社会的信頼のなさ、自我を確立させるための矛盾」による呪縛から逃れ、自らの自由意志により社会問題に取り組むようになったのか、その「意志」と行動する力はどのように生まれたのか、彼らのライフストーリーから見ていきたい。彼らの人生から、個体化社会となった中国社会において、「下から」新たな社会規範と社会関係（本稿では「オルタナティブ」という言葉で示す）を創出する担い手がどのように現れるのか、読み取っていきたい。

## 2. 環境分野における中国の市民活動

本稿では特に、環境分野で活躍している若い市民リーダーを対象として取り

上げる。この分野は「自らの自由意志に基づいて社会問題に取り組む」中国の市民活動の中でも最も歴史が長く、人材の蓄積が厚い分野だと言える。この20年の間に環境分野の市民活動の内容は、啓蒙・啓発活動から実践、監視と評価、さらにアドボカシー活動に至るまで、細分化しつつ広がってきた。李（2013）においてその流れを詳細に論じているが、以下では若者の関わり方を念頭に、再度整理して示したい。

1990年代、中国における環境問題のスケールの大きさと深刻さが露わになり、黄河断流、長江の大水害、砂漠化による大規模な砂嵐が「三大環境災害」とされた（相川，2011）。90年代の半ば頃から「自然の友」「北京地球村」「緑家園志願者」「環境と発展研究所」（現「道和环境発展研究所」）などの環境NGOが相次いで成立し、そのリーダーは環境問題に社会的使命を見出した研究者やジャーナリストなど、カリスマ性のある知識人たちであった<sup>2</sup>。彼らは、民間人が職務に関係なく自らの意志で公共の分野に関わる先駆者となり、社会主義中国においては画期的な「民による公共」の領域を切り拓いたと言える。これらの団体は「第1世代環境NGO」と呼ばれ、知識人リーダーたちがそれぞれの人格的魅力を大いに発揮し、多くの若者を彼らのもとに惹きつけ、NGOの遺伝子を受け継がせた。事実上、環境分野の人材育成の役割を担ってきたと評価できる。

2003年ごろから、環境汚染の実態が一般の人々にも新聞報道で伝えられるようになった。相川は「江沢民政権から胡錦濤政権への交代や、数年内到北京オリンピック・上海万博などの国際イベントを控えての透明化」が、情報が報道されるようになった背景だと指摘しているが（相川，2011：19）、SARSにおける情報非開示が招いた国内外の激しい批判が教訓となったこと、また、それまで情報開示を求めてきたNGO側の努力も要因だと考えられよう。これらの情報公開の結果、何らかのきっかけで具体的な環境問題のケースに出会い、活動を始める若者の新リーダーが多く現れ、「第2世代環境NGO」と呼ばれる団体が登場した。彼らは啓蒙・啓発にとどまらず、具体的な環境保護の実践にも多く従事するようになった。2003年設立の「绿满江淮」（安徽省）の創始者周翔氏は、第1世代環境NGO「環境と発展研究所」が主催していた中国LEAD（Leadership for Environment and Development）プロジェクト第12期研修のメン

バーであった。安徽省の水環境の問題を中心に、環境教育だけではなく、ごみ問題とエコツーリズムにも取り組んでいる。同じく川の環境保護をテーマとする団体として、2002年に設立された「緑色漢江」の創始者運建立氏は元高校生物教師であった。教師のノウハウを活かした環境教育と共に、ボランティア3万人による徹底的な汚染実情調査によって、科学的に水質改善に取り組んでいる。大学生による「環境社団」の活躍もこの時期に目立つようになった。学生団体を母体とし、2000年に南京市で設立された「緑石環境行動ネットワーク」は、若者の環境問題への積極的な参加を促進することにフォーカスし、この分野に多くの人材を輩出した。「田舎」をテーマに、映像教材、エコツアー、自然観察を中心とする環境教育専門の団体「北京天下溪」（2003年設立）や、砂漠化が顕著な地域で活動する「甘肅緑駝鈴」や「内モンゴル赤峰砂漠緑化プロジェクト」、「真相を伝える」ことをモチーフに、ごみ、重金属汚染、大気汚染などについて真相を追究し伝えることによって、人々の環境意識の向上を図ろうとする「ダーウィン自然求知社」、そして汚染情報を整理し、わかりやすく公表することによって、「社会による監督の力」の増大を目指す「公衆環境研究センター（IPE）」などの団体のリーダーにも、若者が目立った。

さらに2008年ごろから、大気汚染問題の表面化により環境問題は「報道される問題」から「誰もが身近に感じられる問題」となり、市民による取り組みも新たな傾向を見せるようになった。インターネットの急速な普及に伴い、ネット利用に慣れ親しんでいる若者たちは、団体や組織活動という形式を超えて多様な実践を創出していった。啓蒙、監視と評価を「民」側で行う取り組みも、個人レベルで実践されるようになった。汚染の現場を撮影し、ブログやミニブログに流せば、たちまち問題を暴露することができる。いまや毎年恒例となった「青空の記録活動」のきっかけを作った「北京青空日記」も、そのころから始まっていた。二人の若者が北京の空を毎日撮影してブログに載せ続け、青空の日数と政府が公表した日数とを比べてみる。この取り組みは『新京報』主催の「2010年度コミュニティに最も感動を与えた人物」コンテストでノミネートと賞賛を得た。2014年に、環境保護法（1979年試案制定、1989年正式制定）の改正が行われ<sup>3</sup>、行政責任と罰則の強化のほかに、情報公開と公衆参加が新た

に規定され、特に「環境公益訴訟」すなわち直接の被害者以外にも代理による環境訴訟を認めたことが、改正法の特徴である。環境分野における市民側の努力を踏まえた法改正だといえる。

2014年以降、PM2.5問題に象徴されるように、環境問題はもはやそこで暮らすすべての人間にとって「逃れられない切羽詰まった問題」となった。政府による対策への不満を背景に、自分たちの手でやれることをやろうとする市民の活動がますます活発化している。若者たちにとって、環境問題は生まれた時から深刻化の一途をたどっている「自分事」となっている。環境分野において若者の市民リーダーの活躍が特に目立つのは、このような背景と経緯があったからだと考えられる。

### 3. 環境分野で活躍する若者たち——そのライフストーリー

#### (1) ライフストーリー分析の手法

本稿は、「個体化」された中国社会において、エゴイズムを克服し、公共心を育み、開発主義的な主流価値観と行動パターンに盲従せず、自らの生き方を確立させた市民リーダーはいかに誕生したのか、「公共」への自由意志はどのように形成されるのかについて、考察したい。そのために、一人一人の生き方の形成過程を知る上で最も効果的だと思われる手法、ライフストーリーのインタビューの手法を採用することとした。

ライフストーリーは「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語である」。それは個人のライフに焦点を当てつつも、その個人の語りから「自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つでもある」という（桜井，2012：6）。この手法は、桜井によればまだ数十年の歴史しかなく、「定まった研究法」とは言えないが、特徴は考察の対象を「合理的な人間」という従来の社会科学が前提としてきた人間像ではなく、「生活者」としてとらえることにある（桜井，2012：7）。そこには、現実的には人間は必ずしも「合理的な選択」をするとは限らず、生産や労働中心の考え方では「生命・生活の生産と再生産」を十分にとらえることができない、という問題意識が反映されていると言える。本稿は、経済発展と物質

的な豊かさを全力で追い求める今の中国の主流価値観からすれば、「合理的選択」をしたとは思えない若者たちの生き方を考察しようとするものである。

ライフストーリーは、ライフヒストリーと親近性が高いという(桜井, 2012: 9)。しかし、ライフヒストリーにおける人生の語りは、「時系列的に編成される」ものであり、かつ「事実を伝える」という考え方を伴っているのに対して、ライフストーリーは、聞き手とのコミュニケーションにおいて、語り手が過去の自分の人生や自己体験の「意味を伝える」語りのことである(桜井, 2012: 11)。事実を時系列的に伝えるのではなく、聞き手との会話のやり取りの中で、自分の人生や経験の意味を解釈して伝えるのが、ライフストーリーである。したがって、聞き手の問題意識が語り手の語りに影響を与え、「話と聞き手の間で展開される相互作用の所産」としてストーリーがある(大久保, 2009: 9)。

## (2) 本研究の調査対象と調査方法

本研究は 2016 年 11 月から 2017 年 1 月にかけて、環境分野の若者の市民リーダー 13 名を対象に、ライフストーリーのインタビュー調査を依頼し、期限内で 11 名実施できた。4 名は実際現地に赴き、対面によるインタビューを実施し、残りの 7 名は、WeChat という中国版 LINE の通信ソフトを利用した。

13 名のリーダーの選出においては、主には環境保護分野において特に活躍している若者のリーダーを選出し、資金や運営のサポートを行う環境 NGO「合一緑学院」の「勁草プロジェクト」の協力をいただいた。そこで選ばれたリーダーの中から、1980 年代以降に生まれたリーダー(およそ 36 歳以下)を推薦してもらい選定を行った。なお、合一緑学院の創設者 A 氏、及び基金会で環境分野の NGO を支援していた B 氏も対象者としている。

勁草プロジェクトは、「成長期」の環境保護団体の「中核的人材」を支持するプロジェクトである。2012 年 12 月から環境分野に熱心な北京市企業家環境保護基金会(SEE 基金会)と GLOBL GREENGRANTS FUND(以下 GGF)が共同でスタートを切ったプロジェクトであり、その後浙江敦和慈善基金会や南都公益基金会、深圳市マングローブ湿地保護基金会も支援に加わり、合一緑学院が実施責任者として運営している。「成長期」の定義としては、「一定期間の模索



を経てすでに自分たちの活動分野についてある程度把握しており、活動の方向性が明確であり、中心となる事業内容も形成されている状態。かつ中心的なメンバーが安定し、専従化・専門化が進んでおり、調達する資源の多角化も進んでいる状態」だという。支援対象となるこのような成長期の環境保護組織の「中核的人材」とは、端的に団体運営の責任者（CEO）を指す。選定されるリーダーには「向上心、責任感、寛容、適材適所の人材配置能力、仕事に対する熱意、成果と結果へのこだわり、伸びしろ」などの素質と傾向が求められる。選ばれたリーダーには3年間、合計30万円（約500万円相当）の資金援助が提供されるほか、企業会やNGO業界のベテランによるメンター制度により、一対一の助言やスキル指導のサポートが得られる<sup>4</sup>。2013年から毎年選抜が行われ、すでに30名以上のリーダーがサポートを得ている。

インタビュー実施のスケジュールは以下のとおりである。

表1 インタビュー実施のスケジュール

時間	対象者	活動団体	方法
2016年11月11日	D氏	自然の友	対面インタビュー
2016年11月12日	A氏	合一緑学院	同上
11月12日	K氏	楽水知行	同上
11月12日	B氏	アリババ基金会（現在は「公益研究院」）	同上
12月19日	E氏	成都康華コミュニティ发展センター	WeChat 経由のインタビュー
12月20日	F氏	緑行齊魯行動研究センター	同上
12月20日	I氏	紹興市朝露環境保護公益サービスセンター	同上
12月26日	G氏	内モンゴル西烏旗放牧区情報サービスセンター	同上
12月27日	C氏	上海愛芬環境保護科学技術コンサルサービスセンター	同上
2017年1月3日	H氏	江西青贛環境交流センター	同上
1月10日	J氏	寧夏青緑環境保護センター	同上

### (3) 環境分野の若きリーダーたち——インタビュー結果の紹介

ここでは、インタビューの結果を対象者の年齢順に整理して示しておきたい。対象者のライフストーリーについては、以下の6つの質問に沿ってインタビューを行った。

- ① 今はどんな活動を、どんな方法で行っているのか、なぜそのような方法を取っているのか（活動内容・手法）。
- ② いつからその活動を始めたのか、なぜ始めたのか（活動のきっかけ・背景）。
- ③ その前の人生経験。何が自分に重要な影響を与えたのか。特に、主流価値観と行動パターンから抜け出すことに影響を与えたものは何か（活動の意志の由来）。
- ④ 今の活動を続ける力はどこから来るのか（継続の力）。
- ⑤ 今の生き方、生きる状態についてどう考えるのか（自己評価）。
- ⑥ 中国の若者の生き方について、どんな感想を持っているのか（若者の生き方の評価）。

表2 A氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1979年生まれ。2015年より合一緑学院CEO。財団と協力し環境分野のデータベース提供、NGOの組織力強化、業界を支える人材育成に従事。
活動のきっかけ・背景	江蘇省生まれ。97年南京大学に入学し、環境保護の学生社団ネットワーク「緑石環境行動ネットワーク」とBBS「済溪論壇」を創設。卒業後韓国に2年間留学し、2005年から新聞記者を5年間。「良いことは必ずしも支持してもらえないとは限らない」と支える側の重要性を痛感しGGFへ。
活動の意志の由来	子どものころから畑で自然と遊んでいた。『新京報』ですべて部門を経験しメディアの中立性について深く考えたこと。歴史好きな父親の影響。
継続の力	「考え抜くことは苦しいが、何も考えないことがもっと苦しい」。
自己評価	優等生タイプで一途。「落ち着くことを知らない、止まることができない」。
若者の生き方の評価	社会が原子化・多様化、情報が多元化。孤独だが個性を追求する人が増えた。経済的プレッシャーが厳しく思いを実現する障碍となっている。

表3 B氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1981年生まれ。アリババ基金会の環境分野支援事業の仕掛け人。現在は国際公益学院で人材育成とシンクタンク事業に従事。
活動のきっかけ・背景	2000年雲南大学に入学し、環境保護社団に参加。学生社団同士の交流、BBSでの交流が盛んで、環境保護業界の著名人と一緒に活動する機会に恵まれたことから2004年から2013年まで環境NGOに勤め、うち2年間はドイツで林業を学んだ。2013年から2016年までアリババ基金会で環境分野の支援事業の枠組みを確立させた。「仕掛け人」としての誇り。
活動の意志の由来	一緒に仕事をした「師」と呼べる環境分野のキーパーソンたち(山水自然保護センター創始者呂植先生など)。アリババグループCEOの馬雲氏。
継続の力	商業的成功を活かした公益事業支援のプラットフォームづくりへの熱意。
自己評価	「市民」意識が強い。大学入学の際に役人の不正行為により希望の大学に入れなかった際にも、「黙って従う」ことができず権利を主張した。
若者の生き方の評価	2004年から2009年ぐらいまでの時期に環境分野で活動する若者は市民意識が強くアドボカシーも多くあったが、今はプロジェクト遂行が中心。

表4 C氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1983年生まれ。2012年に上海愛芬環境保護科学技術コンサルサービスセンター設立、CEO。上海で自分たちが開発した社区(地域コミュニティ)ベースのゴミ分別収集実施モデルに沿って、生活ゴミの分別を推進。2015年までに91の社区で実施。
活動のきっかけ・背景	上海の郊外で生まれ育ち、環境の悪化を肌で感じていた。2011年からNGO「コミュニティ・アクション」でゴミ分類を進めるボランティア、その後プロジェクト・マネージャーに。以前に参加した環境保護の活動に比べると、ゴミの分別は「すべての人が実践できる活動」と実感。2012年に活動の専門性を高め、資金調達を容易にするために、仲間9人と一緒に独立して今の団体を創設。
活動の意志の由来	子どもの頃育った上海の郊外には川や畑があった。中学校以降工場が建ち並び、川が黒く臭くなり、空気も汚れた。2002年から2005年にスイスで留学したが、環境の違いに愕然。両親も環境汚染による健康問題を抱えていた。環境問題による生活の質の低下が明らかだった。
継続の力	「心で思っていることを実際に実現したい」という思い。社区での実践によって、実際目に見える変化が起きたこと。ボランティアが増え、同じように環境を守るための活動を始める人々や、財団・企業からの支援。ゴミ問題の分野では知名度の高い団体となっていること。
自己評価	頑張る方向性が見つかった。挫折もあるが、チャレンジこそ人生。
若者の生き方の評価	今の若者の生き方はもっと多面的个性的。ライフスタイルも仕事も考え方も嗜好も、情報化により無限の可能性のように見える。同時に無数の戸惑いも生じている。

表 5 D 氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1984 年生まれ。2006 年～2012 年「自然の友」スタッフ。1 年間香港留学後、2013 年末に自然の友に戻り CEO へ。組織のマネジメント全般を担う。組織の「管理」「戦略」「社会的位置づけ」の把握を重視。外の誘惑（投資や名誉など）に抵抗し、組織内部のエンパワーメントに集中。
活動のきっかけ・背景	2002 年大学入学。「自然の友」の会員資格を得る。環境保護学生社団に参加し、自分の能力が認められる喜びと優しくて優秀な人々に出会ったことの影響が大きい。
活動の意志の由来	実家が北京郊外の植物園の中にあり、木が友達だった。自然を愛おしく思う「心の声」を常に感じられる。14 歳から自然の友を知る。森林生態の専門家と社会科学院の専門家 2 名からも多大な影響を受けた。
継続の力	「楽しく健康に」以外プレッシャーをかけない両親。志を理解し能力を評価してくれる妻。尊敬できるこの分野の先輩たち。何より一緒に苦勞を乗り越え、互いの頑張りを見ることができると同業者・仲間たちの力。
自己評価	一回過勞で体を壊したことが教訓。今は天性と心の声に従った生き方ができていると感じている。
若者の生き方の評価	経済的な自立がすべての土台。特に住宅問題が大きなプレッシャーになっている。北京での暮らしは基本的なコストが高い。

表 6 E 氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1984 年生まれ。2007 年から成都康華コミュニティ発展センターに加入、2012 年から CEO。主に成都近郊の湿地で外来植物の除去と科学的な堆肥作りの事業を社会的企業として行っている。
活動のきっかけ・背景	子ども時代農村でよく遊び、自然や野生動物が好き。現在は野生動物植物のカメラマンと成都野鳥の会の副理事長も兼任。四川農業大学で林業を専攻し、専門家の下で調査研究やボランティアを経験。「科学知識を環境保護の分野に活かす」ことの重要性を認識。2006 年に携わった WWF のプロジェクトで成都の水源地調査を行い、現在の活動地である湿地と出会う。
活動の意志の由来	学んだ知識を現実の問題解決に役立てたいという思いから、多くの野生動物植物分野の専門家と活動をともにして学び、彼らから大きな影響を受けた。
継続の力	科学と知識の力。自分のチームがあり、出資者もいる。
自己評価	熱意とアイデアだけでは問題は解決しない。知識と科学の力を発揮できる満足感。「方向性と道筋を決めれば後は続けるのみ」。何をやるにしても楽しみはその過程にあり努力が必要。自分の生存状態に満足している。
若者の生き方の評価	それぞれの生き方が千差万別だが、積極的で楽観的で科学的な態度と思考法が必要だと感じる。情報が氾濫し瞬時に伝わる時代を生きる若者には、他人に左右されないように、夢と思考と行動力が求められている。

表7 F氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1986年生まれ。2012年に緑行齊魯行動研究センター創設、CEO。山東省の「環境幸福感」を高めるために情報公開（各種汚染データの公開）、公衆参加（2012年から2016年まで2000人以上が参加）と法的支援の手法で、民間による環境汚染監督体制の構築に尽力している。
活動のきっかけ・背景	2004年に済南大学に入学し、農村支援の学生団体に参加。農村のコミュニティスクールづくりに身を投じ、「社会の進歩に携わること」に感動し、多くの仲間を得る。2008年卒業後環境保護関連の仕事に従事したい一心で、環境プロジェクトを行う会社や砂漠化に取り組むNGOを経験し、環境保護には「英雄」も大事だが、人々の参加と支持が不可欠と認識。
活動の意志の由来	学生時代に経験した農村でのコミュニティスクールづくりの活動で自身の社会的価値に開眼。砂漠化問題に取り組むNGOの英雄への敬服。
継続の力	NGOの仕事が性格に合っている（企業が合わない）。求めたい価値、仲間の存在、そして自分たちの仕事の成果に対する自信。
自己評価	「責任者（リーダー）」向きではないが「これは自分のやるべきことだ」と一旦思えたらとことんやる気質。名誉や評価に無頓着でそのような向上心はないが、積極的行動者。自然で穏やかで「過程」を楽しんでいる。
若者の生き方の評価	それぞれが輝く生き方を見つけてほしい。そのためには自主性、判断力、社会的責任感、自らを律することが求められる。

表8 G氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1986年生まれ。2011年から内モンゴル西烏旗放牧区情報サービスセンターCEO。遊牧民の持続可能な生産・生活スタイルの再生に従事。
活動のきっかけ・背景	1998年高校卒業後解放軍に入隊。2000年退役後、故郷の人々の生活レベルの停滞と草原の破壊に衝撃を受け、視野を広げるために広州と新疆に出稼ぎに。2002年から友人や親戚を組織し互助団体を立ち上げ、2004年から社会団体を設立し、遊牧の生産生活スタイルを守ることによって草原の生態を守る活動を開始。2005年から民間環境分野の研修を多く経験。
活動の意志の由来	子ども時代の草原の風景。遊牧民族が開発によって元の生き方を失い、生活が相対的に厳しくなっただけでなく、生態がひどく破壊された状況への危機感。モンゴル族としての生き方へのこだわりと誇り。
継続の力	故郷への思い、遊牧民族と遊牧文化への深い誇りと愛情。
自己評価	満足していない。若者にとって「満足」は正しい態度ではない。目標は自分の故郷への貢献なので、継続こそ大切。
若者の生き方の評価	少数民族として、自分たちの地域の発展、民族の発展のためには、若者の努力が不可欠。民族文化へのこだわりが大切。人と自然との調和、どうすれば資源を節約し、民族の文化を発揮できるか、若者は考えるべき。

表9 H氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	2011年に江西青贛環境交流センター設立、CEO。1988年生まれ。情報公開の促進と工業汚染の調査によって環境教育を推進。
活動のきっかけ・背景	2007年に江西農業大学に入学し、環境保護社団に参加。社団内外の豊かな活動に夢中になり、NGO流の考え方に共鳴しこの分野に根を下ろすことに。2009と2010年に2度レノボ青年公益起業コンテストで入賞。
活動の意志の由来	故郷の江西省では「政府機関に入り公務員になる」というのが主流価値観。中学校の時から反逆児で、はみ出し者の作家韓寒の小説『三重門』を愛読した。大学受験で失敗し、その評価には納得できず、今の活動によって自分の能力を父親に、そして世の人に証明したい。大学の先輩の言葉「能力のある人なら、仕事のほうから探し当ててくれる。能力のない人は、仕事を探し求める」。大学の名前ではなく能力で道を切り拓きたい。学生社団の活動によって各種研修や交流に参加、視野が広がり、出世と金を稼ぐ以外の人生があると分かった。
継続の力	自分の人生へのこだわりと、環境分野の尊敬できる先輩たちの存在。9年間のうち、チームの崩壊など挫折も経験したが、「信頼と責任感に背いてはならない」思いで続けてきた。
自己評価	24歳で大学卒業の時から、どんな人生を送りたいか自問してきた。穏やかに淡々と、というのは自分のスタイルではない。自由で味のある人生がほしい。今の状況にはまだ満足とは言えない。「十分に認められた」とはまだ言えない。
若者の生き方の評価	自分は80年代生まれだが、チームメンバーは90年代生まれが多い。若者は、反骨はあるが、信念がなく迷いが多い。現実のプレッシャーに負け、物質主義におぼれ、主流に流される。大半は人生の目標を見失い、理想を語らず、「真に自分のために生きている」とは言えない。自分は家庭に恵まれ、裕福とは言えないが生活の心配がなかったために、社会的尊敬と自己実現を求めて活動できる。ほかの若者の市民リーダーも皆社会的尊敬と自己実現を求める人だと思う。

表 10 I氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1992年生まれ。2013年から紹興市朝露環境保護公益サービスセンターを創設し、CEO。汚染調査と情報公開によって民間による汚染企業の監視監督体制づくりを目指す。対抗型から対話できる状況へと導きたい。
活動のきっかけ・背景	生まれも育ちも紹興市。2007年に紹興初の民間公益組織「紹興公益ネット」の設立に関わり、貧困家庭の支援プロジェクトを企画実施。2009年～2010年はボランティアを組織しチベットへの衣料の寄付や二酸化炭素排出削減の提唱活動。2010年～2011年は紹興市内各地で環境意識の宣伝活動、貴州で貧困学生の支援活動。2011年からアリババ基金会社が支援する水環境保護プロジェクトに関わり、紹興市の工業地域を調査し、汚染による癌患者を訪問し衝撃を受け、環境保護の分野に身を投じる。
活動の意志の由来	高校時代に教育分野の貧困扶助活動（紹興公益ネット）に従事し、貴州やチベットなど最貧地域を自分の目で見て、格差を目の当たりにした際の衝撃。子どもの頃から「反逆児」で、自分の力で社会を変えたい。
継続の力	行動で確実に変化を引き起こしているという実感。財団による資金提供。
自己評価	まだ若いので価値観はこれからも変わると思われる。体の健康、身の安全、基本的な経済的自立さえ実現できれば問題ない。社会を変えるにはまず自身の家族や友人関係が充実する必要がある。
若者の生き方の評価	小さな都市においても物質的な豊かさを土台に、若者の価値体系と生活態度、生存状態が数年前に比べられないほど多面的となり、多様化している。市民参加に関する教育を受けてこなかったため、社会問題や政治への関心と参加が停滞気味。住宅の購入というプレッシャーが厳しい。

表 11 J氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1992 年生まれ。2015 年に銀川青緑環境と持続発展センター創設、CEO。水汚染問題を中心に情報公開、調査研究、データ分析を実施。
活動のきっかけ・背景	2012 年寧夏大学に入学してすぐに環境保護学生社団に参加。2013 年に順調に寧夏環境教育交流センターに加入し、そこを母体として 2015 年に現在の団体を創設。学生社団では全国の環境問題についてある程度把握することができ、寧夏環境が悪化しているにもかかわらず環境 NGO が少ないことを知る。ちょうど寧夏青年ソーシャル・イノベーション発展センターのインキュベーションを受けられたため、団体を創始。
活動の意志の由来	特に何かの影響を受けてこの道に進んだわけではない。80 年代生まれと異なるのは、90 年代生まれは最初から生活が比較的豊かだということ。人格の独立や個性を求めるのは当たり前で、大多数の人は独自の考え方を持っている。その多くはいわゆる「非主流」の考え方だが、現実的には種々の事情から自分のやりたいことができない人も多い。自分は基金会や他の組織からの支援により「やりたいことができた」にすぎない。
継続の力	まだ使命が途中なので続ける。目標は団体の財政基盤の確立。達成するには 5 年～10 年はかかる。達成できたら、ほかの職業に従事する。
自己評価	人生は「追い求めるプロセス」。一つの使命を定めれば、それに向けて努力する。終わったら次を夢見る。環境保護は今の自分の使命なので簡単には諦めない。
若者の生き方の評価	中国の若い世代は夢を持っているが、無力感もある。それぞれ独自の考え方を持っているが、社会関係の拘束性から慎重に求めたいものを追い求めている。機会があれば、皆やりたいことに従事するだろう。

表 12 K氏インタビュー結果の整理

活動内容・手法	1993 年生まれ。2016 年に樂水知行を創設。公衆参加型で水環境のガバナンスモデルを模索し推進している。
活動のきっかけ・背景	2011 年大学に入学し、2 年生から環境保護学生社団に参加し、NGO と接触。主流の人生設計のモデルと異なる「自分の本当の理想」に気づく。
活動の意志の由来	子供時代雲南の地域文化（故郷意識が強い、「天意」に淡々と従う、無理強いない文化）、汚染がひどかったホームタウン（家族・親族に病気になる人が多く、高校 2 年生で父親を肺がんで亡くす）、学生時代に参加した環境 NGO「自然大学」と「緑色大学生論壇」の影響。
継続の力	自らの「思い」（中国語で「情懷」と価値観。共鳴できる人、ことを自らの意志で選びたい。志を共有する仲間と容易に出会い、つながることができた 80 年代生まれの環境リーダーと異なり、「個体化」が進んだ 90 年代生まれは「仲間の存在」よりも「自分の価値観と思い」へのこだわりが強い。若いので「不動産購入」の経済的プレッシャーに直面していない。
自己評価	見栄を張ることに興味はないが、起業意欲がある。商業の論理に賛同できず自分の哲学がある。
若者の生き方の評価	中国社会は「世俗化」が進み、流行るのは世俗化されたものか極端なもの。背景や思想を追究することなく、若者に投機的発想が多い。



#### 4. 若い市民リーダーが如何にして誕生したか——ライフストーリー分析

「先駆者たちは、世界を変えようとしたわけではありません。ただ“自分たち”の世界を変えようとしただけ。でもそれをやっけていく中で、1人、2人、3人、コミュニティや国全体、そして世界の考え方やあり方までを大きく変えてしまうことがよくあるのです」。マーク・アルビオンが著書『社会起業家の条件』において、ザ・ボディショップ創業者のアニータ・ロディックの上記の言葉を紹介している (Mark Albion, 2006=2009: 21)。先駆者となる市民リーダーに注目するのは、彼らの人生に「周りを変え、世界を変える」可能性が秘められているからである。市民リーダーがどのように生まれるのかを考察することは、世界を変える可能性がどこから生まれるかを探ることを意味する。

本稿の1の部分で指摘した「利己的で公共心と社会的信頼が乏しく、自我を確立させられない」という中国の「個体化」の問題は、インタビュー対象者たちによる同世代の若者の生き方に関する評価からも読み取ることができる。では、彼ら自身はどのようにこの問題を克服しているのだろうか。中国社会が激しく変動する中で、数年の違いだけでも意識や行動パターンの変化が生じる。上記のインタビューの整理から、80年代生まれと90年代生まれの違いが見られる。この違いを理解した上で、若者の市民リーダーの誕生をもたらす要因について分析してみよう。

表 13 1980年代生まれと1990年代生まれの市民リーダーの傾向

	1980年代生まれ	1990年代生まれ
人物	A氏(1979年)、B氏、C氏、D氏、E氏、F氏、G氏、H氏	I氏、J氏、K氏
市民リーダーになったきっかけ	学生社団での活動(この点はほぼ共通するが、環境分野の学生社団の隆盛期は2002年~2008年頃までだという。また社団の性質も「つながり熱意が刺激され暖め合う場」から「個性と能力を伸ばす場」への転換が見られる。)	
意志の由来	子ども時代の「心の風景」、情熱	個性と自己実現、理性
継続の力	同じ分野で頑張る仲間たちの存在	他者に認められ評価されること
自己評価	天性を大切に、努力の過程に誇りを	自分の信念とやりたいことに忠実に
同世代の若者の評価	情報化・市民意識の萌芽⇔孤独・経済的プレッシャー増大・理想堅持の困難	多元・多様化⇔世俗化・迷い・現実的な不自由

80年代生まれの市民リーダーの語りには、感性、情熱、理想、市民意識、努力、仲間などの言葉が目立つのに対して、90年代生まれに近づくにつれて、理性、個性、自己実現、他者の評価、自分のやりたいこと、などの言葉が目立った。「個体化」がますます深化していったことが、ここにも現れている。しかし共通して言えるのは、彼らの人生において環境問題への取り組みは「生き方」の一部となっていること、すなわち「社会問題」としてではなく、「自分の問題」として捉え、位置づけていることである。彼らの「エゴ（自我）」の中に、公共と社会の問題が融合されている。では、なぜ彼らが自らの人生において、「自分事」として社会問題に取り組むことができるようになったのか。「個体化」した中国社会において、新しい社会規範と社会関係（オルタナティブ）が「下から」構築される可能性を模索する上で、彼らのストーリーは示唆を与えてくれよう。

### （1）子ども時代の原風景——肌感覚の感性と規範の土台形成

若者の市民リーダーが今の活動に従事するようになった「思い」の根底に何があるのか。インタビュー対象者は幼少期の環境と経験、身の回りの環境を多く語っている。典型的なのは、A氏が言う「天性」、D氏が述べる「心の声」と言える。

A氏：江蘇省の出身だけど、子どもの頃は田んぼでいっぱい遊んだ。「天性」とでもいうべき素直な性格で、本に書いてあることはそのまま信じていたので、「環境は守るべきだ」という意識は子どもの頃からあった。大学に入学して環境NGOの活動に関わると、子どもの頃兄とよく田んぼで遊んでいた記憶が一気に蘇り、活性化したと思う。

D氏：家は北京郊外にある父親の職場の植物園の中にあった。小学校中学校の時はいつも朝5時頃起きて、鳥の鳴き声を聞きながら誰もいない植物園の中を歩いてバス停に通っていた。夜も怖いぐらいに真っ暗になるまでいつも植物園で遊んだ。遠くの学校に通っていたので近所に一緒に遊ぶ友達がなくて、木が遊び友達だった。北京人と言っても、「田舎育ち」の感覚があった。それが自分の「心の声」を作ってくれたと思う。その

後の人生の進路は、この心の声の導きがあるのでほとんど迷うことなく進むことができた。

D氏は植物・生物が大好きで生物学オリンピックにも出場し、大学でもそれ専攻しようとしたが、希望する大学に入れなかったために「旅行管理（観光ビジネスマネジメント）」学科を選んだという。「天文地理、歴史や環境とすべて関わる学問だから」という理由であったが、そこで学んだ観光は「都会の欲望を田舎に持ち込もうとする環境破壊にほかならない」と激しい反発を覚えたと言う。その反発の根底には、子ども時代のこのような経験、自分の「心の声」があると言う。がむしゃらに「自然の友」の仕事に打ち込み、2010年頃体を壊したことで休養を決め、その後香港で政治学の修士課程を修めた。博士課程に進学すべきか、北京に戻るべきか考えるために登山に出かけたという。「何歩も歩かないうちに気づいた。自分の選択はとっくに自分の中にある」。すぐにちょうど募集中の自然の友の「総幹事」（CEO）に応募し、戻ることとなった。

ほかにもC氏やE氏、G氏が子ども時代に遊んでいた家の周りの風景や遊びについて懐かしそうに語ってくれた。彼らはその風景の激しい変化に切実な衝撃を受けていた。上海郊外で生まれ育ったC氏は、遊んでいた川が黒く臭くなり、畑が消え煙を吐き出す工場に置き換えられ、親が健康問題を抱えるようになった様を見ていた。G氏は、遊牧民である自分たちが、遊牧民をやめさせられたことによって如何に「干上がりつつある川に残された魚みたい」になっていたか見ていた。そしてK氏は、故郷の環境汚染によって父親や親戚などの身近な人を病気で亡くしていた。彼らにとって自然や環境は、正に「肌感覚」で感じられる身近なものであり、自然と環境に関する感性、規範と価値観も、自らの「内側」にあると言えよう。

## （2）学生時代の「環境社団活動」——「意志」の成果との出会い

若者が市民団体などに接するようになるのはほとんど大学（高校）に在学中で、学生社団への参加がきっかけとなっている。1980年代生まれの若者が学校に在学していたのはほぼ2000年～2008ぐらい年の間であり、この時期は本稿

2 で紹介したように、環境問題に関する情報が報道されるようになり、第 2 世代と呼ばれる多くの NGO が登場した時期である。環境 NGO 分野の歴史上有名な「怒江事件（環境 NGO の反対により国家プロジェクトである怒江ダムの記事が休止に追い込まれた事件）」を筆頭に、2003～2004 年頃は環境 NGO によるアドボカシー活動が特に盛んな時期であった（王名・鄭琦，2007：79-87）。その背後には、NGO のネットワーク化が挙げられ（相川，2005）、学生社団も学外の環境 NGO と密につながり、熱心に活動する学生たちには、環境保護分野の「伝説の人」と言われるキーパーソンたちに接し、そのすぐそばで一緒に活動する機会も多くあった。B 氏が最も影響を受けたという山水自然保護センター創始者、北京大学教授の呂植氏はまさに第 1 世代 NGO の有名人の一人で、本稿で調査対象者の一人としている 1979 年生まれの A 氏は、「緑石」や「済溪論壇」を創設するなど第 2 世代 NGO においては最も影響力のある一人である。「まぶしい先輩」との出会いによって熱意が点火される若者が多い。B 氏は、「1997 年から 2004 年か 2005 年までだと思うが、学生社団は大学ではまだ『新しい現象』で、大学側もひたすら支援していた。特に環境分野は花形だった」と語る。大先輩や他地域他大学の学生たちと交流できるだけでなく、海外の NGO や財団主催のプロジェクトに参加し研修を受ける機会もあり、一学生でありながら、「活動したいという意志」に従って行動すれば一気に世界が広がり、華やかな成果が感じられるという実感から、環境保護分野の学生社団は人気を誇っていた。

1990 年代生まれの若者が在学するのは、2008 年以降になる。学校では相変わらず環境分野の社団は多く活動しているが、変化が明確に見られるようになったという。

A 氏：2005 年頃までは、「熱意と理想」を強く持って取り組む人が多いと感じていたが、2008 年あたりから、減ってきたように思う。背景には不動産価格の高騰による経済的なプレッシャーの増大がある。

K 氏：熱意と理想のある人が、「周辺化」されるようになったと言える。環境保護に熱心に取り組む若者が、「カッコいい」存在から「変わったやつ」に

なった。…90年代生まれは、仲間から力をもらうというよりも、自分自身の「心の強さ」「意志の強さ」で頑張っている。

H氏：歴史的な段階の推移があったと思う。「青年環境保護の潮流」は確かにあった。大体2000年から2012年ぐらいまで、確かにキャンパスで多くの若いリーダーが生まれたと思う。象牙の塔と呼ばれる利害関係があまり入り込まないキャンパスという環境、若者の情熱がこの潮流を支えた。しかし90年代生まれが大学生になると状況が変わった。彼らは他人ではなく自分自身の「内側」に関心がある。80年代生まれに比べるともっと現実的で理性を重んじる。もう一つの原因は、当初ブームの時は、環境保護分野に入るハードルが低く、ただの宣伝活動の手伝いなども立派な活動とされた。しかし団体数が大きく増え、専門性や能力も求められるようになったので、大学生では務まらないケースが増えた。NGOで仕事をするには、法律やメディア、デザイン、コミュニケーション、技術など総合的に高い素養と能力が求められている。学生団体の「出る幕」が減ってきていると思う。

このように、90年代生まれの市民リーダーの誕生のきっかけには、80年代とはまた異なる要素があるように思える。団体数が増え、専門性が細分化され、インターネットのモバイル化とSNS技術の進展に伴って、先輩から後輩へ、人から人へという「温度のある熱意の伝染」が減り、特定の具体的な問題に対して、知識や技術、スキルを持って対応しようとする「理性に基づく実践プロジェクト」が増えた。市民リーダーの「意志」は、「心の声」に従うものというよりは、「自らの能力の証明、哲学と目標を貫く」ものへと変化していった。

### (3) 「社群」のサポート——尊敬と承認の連鎖による自己肯定

若い市民リーダーが「環境保護」という公共の問題、社会問題への取り組みを自らの人生において「使命」と位置づけ、そのような自我を継続的に形成させていた原動力はどこにあるのか。「迷い」の多い時代、経済的プレッシャーが増大していった時代にもかかわらず、自らの意志を貫く力はどこから来るのか。

「継続の力」に関するインタビューから、「社群（何らかのテーマを共有するグループ）」の存在、そして他者による「評価と承認」が要素として浮かび上がった。

D氏のインタビューは2017年「銀杏パートナーズ」の選定イベント会場で行った。「銀杏パートナーズ」は2011年からスタートした若者のソーシャル・イノベーターを育成するプロジェクトで、2016年まで81名の若者の市民リーダーを輩出してきたという。当初は「南都基金会」が設立した人材育成プロジェクトだったが、2015年から「銀杏基金会」として独立している。NGOやメディア、学術、ビジネスの分野で少なくとも10年以上活動し、特に人徳の厚い人々を推薦人として集め、推薦人から中国大陸で2年間以上公益的实践を行っている20歳から40歳までの若者（国籍無制限）を推薦してもらい、厳格な審査を経て「銀杏パートナーズ」として選出している<sup>5</sup>。3年間の資金援助と海外研修を含めた研修支援、広報支援のほか、このプロジェクトの最大の特徴は選出された若者たちの「社群」を構築することにある、とD氏は指摘する。D氏も「銀杏パートナーズ」の一人であり、「同じように頑張っている仲間の存在」を実際に確認でき、交流し、尊敬し合える関係を持てることが何よりも心の支えになると言う。

90年代生まれのリーダーたちには「社群」形成の機会も増え、実際本研究のインタビュー対象者たちが属する合一緑学院の「勁草プロジェクト」も、同じく合一緑学院による水資源保護NGOの支援プロジェクト「成蹊計画」「成蹊・平和台」も、「社群」形成の機能を持っている。しかし80年代後半もしくは90年代生まれのリーダーにとっては、特定の「社群」におけるつながりと支え合いよりも、さまざまな場において自分自身が「認められる」「評価される」ことのほうが、彼らの自我の形成において重要な意味を持つように見える。

E氏：学んだ知識が現実の問題の解決に役立たなければならない。科学知識は自分の力と自信。

F氏：「社会の進歩に携わることができた」感動が自信につながった。

H氏：自分の能力で道を切り拓きたい。父親やみんなに認められたい。まだ十

分に認められたわけではないので満足できない。

I氏：子どもの頃から「反逆児」で、自分の能力で社会を変えてみたい。

K氏：共感できる人・ことを、自分の意志で選びたい。

一つの潮流に気持ちと熱意を合わせていくのではなく、より若いリーダーたちは自らの能力を発揮することによって自信を獲得したい傾向が見られる。

#### (4) 支援の生態系（プラットフォーム）づくりへのデザイン

以上で若者の市民リーダーの誕生において、肌感覚によって内面化された彼らの感性と規範が活動への意志を生み出していること、学生社団という活動の入り口が開かれていたこと（ただし現在変化しつつある）、各種「社群」における仲間の尊敬と承認に基づく自信、自らの能力が評価された際の自信による継続の力、といった要因を見出すことができた。もう1つ注目すべきは、リーダーの誕生と成長を重要視する「支援側」が、戦略的に支援の生態系（もしくはプラットフォーム）づくりを行ってきたことである。その方向性から、今後のリーダー誕生の可能性を見出すこともできよう。

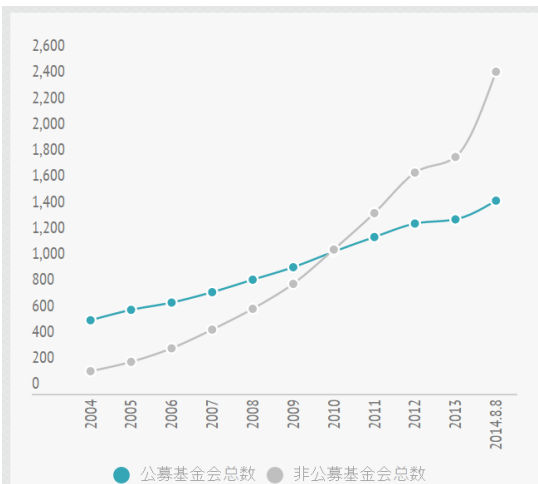


図1 中国における基金会の増加  
 出典：中国基金会センターネットより引用  
 (https://infogr.am/1-817818883573636)

中国では2004年に「基金会法」が施行され、不特定多数から寄付を募らない「非公募型基金会」（企業ないし企業家が設立・出資する財団）は2005年以降右肩上がり増加し、図1が示すとおり特に2009年以降の増加が激しい。2017年1月現在は公募型と非公募型合わせて5551の基金会が活動している<sup>6</sup>。そのうち自然環境

保護に注力する基金会は 53 あるが、資金の 61%が植林事業に集中しており、人材育成に資金を提供する基金会は多くないと A 氏は言う。環境分野の市民活動の支援に最も熱心な財団として、SEE 基金会とアリババ基金会、南都基金会などが挙げられる。では、数少ない基金会の支援において、人材育成の仕掛け人はどのような枠組みをデザインしているのだろうか。

B 氏は 2013 年から 2016 年までアリババ基金会に在籍し、環境分野の市民活動を支援する枠組みを構築したという。1999 年に馬雲氏が創立したアリババ社の企業文化に「公益」の価値観が色濃く反映されているという。特に 2008 年四川大地震以降、民間公益事業（市民による公益的な実践）にアリババは積極的に資金を投入し、2010 年には収益の 1000 分の 3 を公益事業に使うと宣言し、2011 年に基金会を設立した。2012 年の設立当初は合計 7 つか 8 つ程度のプロジェクトしかなく、事業の方向性も計画もない状況であったという。2013 年に B 氏が加わり、環境分野への投入を増やし、さらに 2015 年の環境法の改正を受けて、2016 年には環境分野における支援の 4 つの柱を提示した。「自然教育」「ソーシャル・インベストメント」「公衆参加促進」「情報公開促進」である。

体験教育を強く打ち出す「自然教育」への支援の狙いは、「肌感覚で環境問題を内面化する具体的な事業の場と組織を増やすこと」だと理解できる。「ソーシャル・インベストメント」は「資金の流れを作ること」、「公衆参加」と「情報公開」は、環境分野の市民活動の「社会的支持層と社会的影響力拡大のため」だと考えられる。本研究で取り上げた 90 年代生まれのリーダーの活動内容に「公衆参加」や「情報公開」が目立つのは、基金会側のこのような方向付けによる部分も大きい。

若い市民リーダーの誕生の促進は、当然少数の基金会の支援事業のみでは達成できない。「意志」を抱く若者を増やし、各種社会的資源と結びつけるコーディネーターとしての機能を誰がどのように果たし、支援の生態系を作り上げていくかは、今後も大きな課題となるであろう。



## 5. 終わりに——オルタナティブの潮流を牽引する市民リーダーの誕生を促進する条件

「個体化」社会において、新しい社会規範と社会関係の形成が如何にして可能か。自らの生き方に公共的な課題、社会問題を内面化し、生き方としてそれに従事する若者の市民リーダーのライフストーリーから、いくつかのヒントを見出せた。

一つは「肌感覚」の体験・経験によって形成される感性、規範の感覚、自らの哲学である。この「肌感覚」は子どもたちが成長する中で自然に経験できる場合もあるが、意図的にその機会を増やす努力が必要だと、基金会などの「支援する側」が認識するようになった。2015年から中国では自然教育のうねりが始まっている。直接のきっかけは、2012年から筆者が日本の自然学校分野のキーパーソンたちとともに取り組んできた「中国で自然学校の人材とネットワークを作る」プロジェクトと、リチャード・ループによる「自然欠乏症候群<sup>7)</sup>」の指摘が、2013年頃中国の環境NGOや教育関係者の間で注目されたことであった。2014年に第1回自然教育全国フォーラムが開催され、予想を大きく超える260名が集まったが、2016年11月に開催された第3回には、700名の定員が2日足らずで埋まった。肌感覚による経験にフォーカスする「体験型」の自然教育は、子どもたちの「自然欠乏症候群」への処方箋として提起され、環境保護の関係者だけではなく、教育関係者や野外活動愛好者、有機農業や観光牧場従事者、建築と芸術関係者、民宿やエコツアー関係者、動物・植物学や地質学者、あるいは普通の「親」など、多様な人々がその旗印の下に集まっている。第3回全国フォーラムでは、185団体を対象にした調査報告が公表され、モデルとなりうる20のケースが分厚い事例集に整理された。「肌感覚による経験」の機会提供は、今後市民リーダーの誕生を促進する上で重要なポイントとなると考えられよう。

次に、学生団体の社会的役割が挙げられる。若者の市民リーダーはほとんど学生時代の団体活動がきっかけとなって今の活動に従事している。特に80年代生まれの市民リーダーにとって、学生団体は社会に対する問題意識が生まれる「土壌」を提供しただけではなく、尊敬できるこの分野のまぶしい先輩たち

に出会い、先輩たちの指導や影響を直接受ける機会をふんだんに提供していた。しかし 90 年代生まれの若者にとっては、環境保護分野の細分化と専門化、さらに学生社団の普及に伴って、あこがれの先輩実践者と気軽に一緒に活動する機会が減り、NGO に参加するハードルが高くなった。環境 NGO と学生社団との密接な連携は、この分野の人材輩出を支えていた。市民リーダーは、市民社会の分野内部で育てていく必要がある。NGO と学生社団との連携をいかに保持し、活性化させていくかは、若い市民リーダーの誕生を考える上で不可欠な視点となろう。

最後に、「社群」形成と自己肯定、自信との関連性が注目に値する。承認されることによる自己肯定感と自信は、若者の自我の形成において欠かせない。若者を対象とするインキュベーション事業によって、市民活動分野における若者の「社群」が多く形成されている。社群の仲間や関係者から尊敬を得ること、承認されることによる自信は、若者の市民リーダーにとってモチベーションとなる。だが、80 年代生まれの若者にとって、社群は仲間との協力、連携を意味する側面が強かったのに対して、「選抜される」ことが自明の前提となる 90 年代生まれのリーダーたちは、「仲間による励まし」よりも、「競争のなかで優秀さを証明する」ことに意欲を燃やしているように見える。「仲間」よりも「能力」に価値を見出す若者が増える中、「社群」のあり方を問い直していかなければならない。

「個体化」社会となった中国社会は、リスク社会であると同時に、新しい社会規範と社会関係をもたらさう担い手もその内部において生まれている。このような若い市民リーダーの誕生を促進するには、肌感覚の体験の機会、学生社団と NGO との連携、社群形成の工夫が求められていることを、今回の考察から指摘できよう。

※本稿は 2016 年度駒澤大学特別研究助成（個人研究）による研究成果の一部である。

注

- 1 薛晓源・劉国良、2005、「全球风险世界：现在与未来—德国著名社会学家、风险社会理论创始人乌尔里希·贝克教授访谈录（グローバルリスク社会：現在と未来 ドイツ著名な社会学者、リスク社会論創始者U・ベックインタビュー記録）」、『马克思主义与现实（マルクス主義と現実）』2005年第1巻より。筆者訳。
- 2 「自然之友」は、1993年に中国文化書院の歴史学教授、中国近代史に名を遺した梁啓超の孫でもある梁従誠氏によって創設された。環境と発展研究所の設立者李来来博士は持続可能な発展に関する専門家であり、地球村設立者廖晓義は哲学修士で米国留学経験者。緑家園設立者汪永晨は中央人民ラジオのベテラン記者だった。彼らに共通するのは、急激な経済開発による環境問題に対する抑えられない危機感と義務感、そして知識人、社会的エリートであるゆえの、相対的に豊かな社会資源であった。
- 3 環境分野の法制定については、片岡（2011）、岡村（2014）を参照されたい。
- 4 勁草プロジェクトについては <http://www.jctx.org.cn/a/about/>参照
- 5 银杏パートナーズについては <http://www.ginkgofoundation.org/hbsq.html> 参照
- 6 中国基金会センターネット <http://data.foundationcenter.org.cn/foundation.html> による。
- 7 リチャード・ループが2005年の著書『あなたの子供には自然が足りない』で提起した「自然体験の不足による子どもの精神的不安定さなどの症状」を指す。具体的には、集中力の欠如、落ち着きのなさ、我慢弱くわがまま、他人に対する気遣い、人付き合いが苦手などの症状が挙げられている。

参考文献

日本語文献

- 相川泰, 2011, 「中国の環境破壊と社会的対応」, 中国環境問題研究会編「中国環境ハンドブック（2011-2012年版）」, 蒼蒼社：14-23.
- , 2005, 「中国における『草の根環境 NGO』のネットワーク化」, 『環境情報科学』34-3：47-51.
- 今枝法之, 2009, 「U・ベックの『個人化』論について」, 『松山大学論集』第21巻第3号：303-331.

- 伊藤美登里, 2008, 「U・ベックの個人化論—再帰的近代における個人と社会」, 『社会学評論』59(2): 316-330.
- 片岡直樹, 2011, 「中国環境法の多様な姿」, 中国環境問題研究会編「中国環境ハンドブック (2011-2012年版)」, 蒼蒼社: 30-49.
- 李妍焱, 2013, 「中国における環境問題に取り組む市民参加の組織について」, 『研究誌 季刊中国』第114号: 43-55.
- Mark Albion, 2006, *True to Yourself*, Berrett-Koehler Publishers. Inc., California, 斎藤慎・赤羽誠訳, 2009, 『社会起業家の条件—ソーシャルビジネス・リーダーシップ』, 日経BP社.
- 岡村志嘉子, 2014, 「中国の環境保護法改正」, 国立国会図書館調査及び立法考査局編『外国の立法』262: 139-154.
- 大久保孝治, 2009, 『ライフストーリー分析—質的調査入門』学文社.
- 王名・鄭琦, 2007, 「中国環境 NGO のアドボカシー活動についての一事例研究—怒江事件を事例として」, 『国際開発研究フォーラム』33: 79-87.
- 桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂.

## 中国語文献

- 冯 莉, 2014, 「当代中国社会的个体化趋势及其政治意义 (現代中国社会の个体化趨勢とその政治的意味)」, 『社会科学』2014年第12巻: 20-27.
- 王春光, 2013, 「个体化背景下社会建设的可能性问题研究 (个体化の背景下における社会建設の可能性に関する研究)」, 『人文雑誌』2013年第11号: 91-99.
- 王建民, 2013, 「转型社会中的个体化与社会团结—中国语境下的个体化议题 (社会転換期における个体化と社会の団結—中国的文脈における个体化の論点)」, 『思想戦線』2013年第3巻第39号№.3: 79-83.
- 王力平, 2013, 「风险与安全: 个体化社会的社会学想象 (リスクと安全—个体化社会の社会学的想像力)」, 『新疆社会科学』第2号: 118-123.
- 薛晓源・劉国良, 2005, 「全球风险世界: 现在与未来—德国著名社会学家、风险社会理论创始人乌尔里希·贝克教授访谈录 (グローバルリスク社会: 現在と未来—ドイツ著名な社会学者, リスク社会論創始者 U・ベックインタビュー記録)」, 『马克思

主义与现实 (マルクス主義と現実)』2005年第1巻: 44-55.

Yan Yunxiang, 2009, *The Individualization of Chinese Society*, 陸洋ほか訳, 2012, 《中国社会的个体化》, 上海译文出版社.

## 英語文献

Beck, U., 1992, *Risk Society: Towards a New Modernity*, London: Sage.